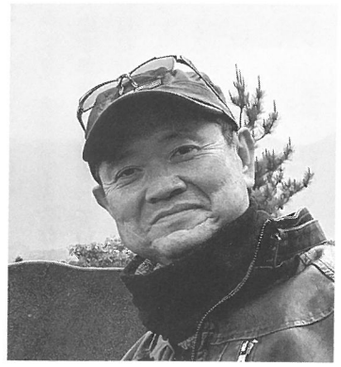
発達保障インタビュー

バトンゾーン

第15回



鹿児島　ユーススコラ鹿児島
西園健三さん

待っている人のねがいを届け続けて
――鹿児島の高等部運動からその先へ（上）

子どもの頃から野球好きで、高校球児だった私は、大学でも野球を続けたくて、地元の鹿児島大学に行きたかったんです。偶然の成り行きで教育学部の養護学校教員養成課程に入りましたが、授業にはちょっと出るくらいで後は野球ばかりしていましたね。

そんな大学生活を送っていましたが、集中講義で埼玉大学から講師に来られていた清水寛先生（全障研顧問）の話を聞いた時にはしびれました。卒論では障害児教育史を学びたくて、埼玉の清水先生の研究室にも何度か足を運びました。

運動との出会い

教員になり、最初に勤めたのが県内で唯一寄宿舎をもつ知的校で、九州一のマンモス校と言われていた串木野養護学校でした。1984年のことです。家の近くに学校がなく、学校に通うために寄宿舎に入らなければならないという〝6歳の別れ〟が当たり前の世界でした。離島や遠方の地域から親子で来て、お母さんが帰る時には、寄宿舎の先生が「泣きじゃくる子どもを抱っこして母子が別れていく姿」をしょっちゅう目の当たりにしていました。あまりにもひどい…と教育条件の貧しさを初めて肌で感じました。

次に異動したのが現在の霧島市にある牧之原養護学校でした。牧之原には高等部がなく、遠く離れた串木野の寄宿舎に入れば高等部に行けるよという状況で、これはおかしいと思っていたところ、第2の教育権保障運動である高等部設置運動が沸き起こりました。全障研の青年期集会で渡部昭男さん（現・大阪成蹊大学）の話に感動し、全国のみなさんのとりくみにあこがれました。「こういう地域や親と共に生きる教師になりたい」とその時思いましたね。

もう一つ、訪問教育との出会いが牧之原の時にはありました。異動のあいさつの時、串木野であこがれていた先輩教員が牧之原で訪問教育をしているよと聞いて、ハンマーでガーンと殴られた気がしました。なぜなら串木野で見ていた訪問教育は、「非常勤職員の女性教員たちが週に2回細々とやっているような教育」で、私が目指そうと思っている教師像とはちがうと思っていたからです。

鹿児島市の繁華街・天文館で、親と子どもたちと一緒にとりくんだ署名活動

牧之原養護学校は、小・中学部80名の児童生徒の内30名が訪問教育対象児という状況で、全国一の訪問教育占有率である鹿児島県の象徴的な学校でした。週2回・計4時間、実に6分の1の授業時数の教育しか受けることができませんでした。また、牧之原には常勤担当者もいましたが、ほとんどは非常勤で、研修や授業準備もままならなく、教育の格差、安あがりの教育の実態がそこにはありました。そんな状況の中で、子どもたちの笑顔や親の苦悩に接するうちに訪問教育の世界に興味をもち、やってみたいなと思うようになったんです。

奈良県であった全訪研（全国訪問教育研究会）全国大会に夜行バスに乗り行ってみました。そこで全国の仲間に出会い、こんなに大変なところでがんばっている人がいるんだと。それが私の第2の原点になっています。

待っている人がいる

それから数年にわたって県内20数万人の署名を集め、各養護学校に次々に高等部を設置させていきました。1997年には全県の高等部の訪問教育を実現させました。「制度は変えられる、今のままでは決してないんだ」ということをその時強く感じました。

いつも子どもたちの輝く瞳と親御さんたちの思いに突き動かされます。青年期集会で全国の署名活動や教育委員会との交渉、議員さんとの懇談などのとりくみを学んで帰ってきて「鹿児島でもやりましょう」と話をすると、みなさん「待ってました！」という感じなんです。親御さんたちが何とかならないかという思いをずっと抱えながらも、諦めていた鹿児島の状況があったんだなと。そういう動きを待っていたんだと思いました。人々の思いをつなぎ、親子のねがいを地域に届けていくことが私の役割で、これまでやってきたことなのかなと思います。

今でも思い出すと涙が出るのですが、署名活動のなかで、座敷牢に近い状況にあった子どもの親御さんが、「隣近所にも我が子のことを話していなかったけれども、実はうちにはこういう子がいて…と説明したら、隣の方にわかってもらえて、署名してもらえたことがうれしかった」と署名用紙のウラに書いてくれていました。見よう見まねで始めた運動でしたが、これが運動なんだなと思いました。

その人たちがもっている思いにどのようにふれていくのか、自分がそのことにいつ気づくのかということが大切ではないでしょうか。そして、待っている人は今もたくさんいるのではないかと思います。

（7月号に続きます）